



おもしろ にいがた学

新潟方言・郷土史研究家 大田 朋子

プロフィール

新潟市出身（出生地は柏崎市）
東京で大学・研究室生活を経てUターン
雑誌記者、コピーライター、ライター、インタビュアーの仕事をするうちに、方言や習俗、歴史に魅せられ、研究、普及につとめる
心理学・新潟学等講師、経営学修士(MBA)、新潟郷土史研究会会員
著書「独断大田流にいがた弁講座」（新潟日報事業社）
「おもしろ えちご塾」（恒文社）
「郷土とことわざ」「ことわざを楽しく学ぼう、社会・文化・人生」（人間の科学新社・共著）
「明治大学政経論叢 2016年度（新潟美人）」
（明治大学政治経済研究所）等

「茄子王国新潟」

今季節は、天高く馬肥ゆる秋、食欲の秋でもあります。

農林水産省の「野菜生産出荷額統計」（平成28年度）によれば、茄子の作付面積は新潟県が全国1位の「茄子王国」。一世帯あたりの茄子の年間支出はなんと、横浜市に次いで新潟市が2位というデータもあります。と書くと、数字のチェックに厳しい方からは、「ほんとかね？横浜市と新潟市の茄子の値段が高いのではないかね？」と声も上がるでしょうが、県内では、丸いの長いの、十全に、エンピツ、つらら、巾着、水茄子、長岡巾着（茄子）等々、形も名前もいっぺこと。漬けたり、煮たり、焼いたり、蒸したり、詰め物をしたり、くず餡をかけて冷やしたりと食べ方もいっぺこと。地域では、砂糖に漬けた銘菓（玉露に最高）や、お菓子やあんぼ（十日町・魚沼地方のおやき状のもの）の餡に使ったり、水菓にしたりと伝統的な味から新作のものまで加工もふつつあります。

まさに、新潟県は茄子王国です。とくに県内では10月末まで出荷が続くため秋こそ、「終わり初物」を楽しむ時期ともいえます。

さて、この秋茄子、「嫁に食わずな」ということわざがありますが、新潟には「茄子を（料理した一つを二人で）分けて食べると仲たがいのする」という言い伝え（ことわざ）があります。あれこれ調べてみても県内以外では見当たりません。またそれだけに新潟県と茄子の関りの深さがわかるような気もするのです。

では、なぜ、茄子を分けて食べると仲たがいのするの？誰が言い出したかは知らないけれど、先人たちの経験が生きていることわざには、何らかの意味があるものですが、いまひとつこの茄子のことわざ

が解明できません。

そもそも、茄子王国新潟で一本の茄子を分けて食べるだろうか？たとえ大凶作だとしても、皮はぷりり中はしんなりした茄子料理や歯ごたえある皮と瑞々しい果肉の漬物を、あらかじめ切っているならともかくその場で箸か手で分けるのは難しい作業です。天ぷらだったらどうか？田楽だったら？焼き茄子だったら？だいたい加熱した茄子は、ぐにやり・くたくた、分けにくいことこの上ないし、きっちり半分にするのは困難です。上質な肉質である新潟の茄子は、ことのほか二等分が難しいため、「こっちが大っきてば」「いや、いや、そっちらねっか」と口論になるので「茄子を分けて食べると仲たがいのする」のか？なんていうほど、県民はあさましくないのにね・・・とあれこれ考えてしまいました。

このことわざの真意を確かめるには、「仲たがいのしたい相手と茄子を分けて食べてみる」という荒技も考えましたが、そもそも仲たがいのしたいほどの人物と、わざわざ茄子料理を分け合って食べる機会をどうやって設定するか？誘い出したとしても、苦心して二つに分けたふにゃけた茄子の片割れを箸の頭で相手側に押しやり、やでもか食べさせたりしたらかえって険悪な関係となるのは目に見えています。こう考えると、やはり、上質で味の良い新潟の茄子は分けずに食べる、そんげことしなくてもいっぺこと新潟には茄子があるて、でやはり「茄子王国新潟」でありました。

